

評

「ベルリンの東」

有刺鉄線に感じるリアル



重大な戦争犯罪の加害者と被書者。両者の関係がその子供たちの世代に与えた影響と結果を、硬質なタッチで描いた優れた劇が登場した。名取事務所が日本初演したハナ・モスコビッチ作、小笠原響演出、吉原豊司訳の「ベルリンの東」である。作者はカナダで活躍するユダヤ系の若い女性の劇作家。登場人物が三人だけ、約1時間40分の一幕劇は、2007年にトロントで初演されて高い評価を得た。題名はアウシュビッツ強制収容所を意味する。

書斎風の空間で、青年ルディ（佐川和正）が観客に自分の体験を語る形式で劇が進む。南米パラグアイ育ちのルディは、父がナチスの元高官で、アウシュビッツで人体実験をした軍医だったことを知つて家を離れ、ベルリンに留学。そこで米国から来たユダヤ人の学生サラ（森尾舞）と恋仲に。サラの母親はかつてアウシュビッツの囚人だった。ルディは父のことをサラに隠し続けるが、友人（西山聖了）の来訪で嘘が発覚する。作者は観念的な言葉を一切使わず、日常的な言葉と人間関係だけを通して、戦争犯罪が否応なしに次世代にもたらす重さを簡潔に描いていく。

舞台中央のドアの両側に、強制収容所を暗示する有刺鉄線（戯曲の指定ではない）を張った装置（内山勉・美術）が効果的だ。戦争の加害性を示す有刺鉄線は劇の単なる背景ではなく、国境を超えて今も私たちの現実を囲んでいるように感じられるからだ。

小笠原の演出は細やかで、リアルな感触に富んでいる。三人の俳優たちも抑制の利いたいい演技を見せる。樋口藍・衣装。

左から佐川和正、森尾舞
II坂内太氏撮影

15日まで、東京・下北沢の「劇」小劇場。
(扇田昭彦・演劇評論家)

日本経済新聞(夕刊)

2015年(平成27年)2月12日(木曜日)

演劇

■ 名取事務所「ベルリンの東」



佐川和正と森尾舞=写真 坂内 太

小さな小さな劇場。息づか今まで生々しい演技。演者と対話しているかのよう、ひそやかなじま。それは忘れがたい観劇体験だった。

タイトルはアウシュビッツを暗示する。ナチス時代、中のユダヤ人にとって「東」は死を意味した。が、これはホロコーストを告発し、悲劇をえぐる舞台ではない。浮かびあがるのは、息子や娘の世代に忍び寄る不吉な影、おびえつとも愛し合う男と女の肉体のさびしさ。ひかれ合えば合うほど切ない愛の形だ。

パラグアイに住むルディは同性愛者の友人ヘルマンと関係を結び、父の秘密を聞きたす。アウシュビッツで人体実験にかかわった戦争犯罪人と

若手が好演、人生の深淵見せる

2時間に満たない翻訳劇。3人の若い役者がいい。客席に話しかけ、進行役も兼ねるルディ役佐川和正のボーカルフェイスは次第に悲哀の色を帯びる。ヘルマンの西山聖了はベルリンに現れるとき、サラに秘密を暴露する怪しい情念をもつ。ともに感情の密度を増したいが、ひたむきな好演だ。サラの森尾舞が抜群の瞬発力、愛の衝動が鮮やか。ここにある愛の渴きは人間の真実であり、鋭い傷みに反転する。手をどううとし、ひとつこめる。それだけのしぐさの、なんと悲しいことか。

作者のハナ・モスコビッチはカナダの新進女性作家。この作は2007年にトロントで初演され、熱い賛辞を集められた。ほかにアフガニスタン戦線に送られたカナダ軍兵士の心の病を描いた作などがある。輝く才能だ。吉原豊司訳、小笠原響演出。舞台の結末に人生の深淵がみえる。15日まで、下北沢「劇」小劇場。(編集委員 内田洋一)